

二つのコンタクト・ゾーン： 終戦までのハンセン病療養所における短歌をめぐって

松 岡 秀 明

はじめに

第二次世界大戦が終るまでの日本において、ハンセン病と短歌は重要な関係を持っていた。以下、具体的に示す。(i) 短歌は、「絶対隔離」という状況のなかで、ハンセン病患者たちが療養所の外部とつながる可能性を持った表現様式であった。(ii) 大正天皇妃の貞明皇后が、1932年に大宮御所の歌会で「癩患者を慰めて」と題して「つれづれの友となりても慰めよ行くことかたきわれにかはりて」と詠んで以来、天皇制とハンセン病の関係のなかで短歌は大きな役割をはたした。(iii) 1938年1月に出版された明治以後の短歌のアンソロジー『新万葉集』の第一巻に、明石海人の十一首を筆頭に数名のハンセン病患者の短歌が収められ話題となり「癩短歌」がブームとなった⁽¹⁾。

短歌をととして、ハンセン病患者たちは療養所の外部とつながることができたばかりでなく、療養所の外の人々そのなかには皇族や歌壇および文壇の人々も含まれる一が患者たちにメッセージを送ることもできた。すなわち、短歌はハンセン病療養施設の内と外との一方通行的ではなく双方向的コミュニケーションを成立させる文芸の様式であった。

その一方で、「癩短歌」というジャンルが成立することによってハンセン病患者たちの表現はそのなかに囲いこまれていった。この現象は、ハンセン病患者の絶対隔離という当時の国家政策のもとに生じ、そこには当事者であるハンセン病患者だけではなく、ハンセン病療養所の医師、歌人、作家、さらには貞明皇后がかかわっていた。

すなわち、第二次世界大戦の終戦までの日本では、ハンセン病と社会さらには国家との関係において短歌は重要な意味を持っており、ハンセン病のスティグマ

と患者のアイデンティティ、病いの自己表象、病む者と総力戦、天皇制と短歌といった重要な研究テーマが含まれている⁽²⁾。しかし、この点に注目した研究は大内（2008）や荒井（2011）が部分的に行なっているもののこれまで十全には行なわれておらず、その研究は端緒についたばかりである。

慢性病を患う人々がその病いに対する社会のまなざしをどのように内在化し、そしていかに自らを表現するかについての研究の蓄積がある文化人類学の一分野である医療人類学の観点から、本稿では文学研究者のプラットが創出した分析概念である「コンタクト・ゾーン」を用いて、医師で歌人の内田守が在職した時期の熊本九州療養所（1924~36）と岡山の長島愛生園（1936~42）に焦点をあわせ、ハンセン病短歌を検討する⁽³⁾。

論を進める前に、本稿で用いる「ハンセン病短歌」を定義しておく。「病気」と「病い」は日本語ではほぼ同じ意味だが、文化人類学の一分野である医療人類学では、この二つを別の意味で用いることがある。一般の人が理解し、感じている病気のイメージや経験を「病い」(illness)、医療の専門家が定義する概念や診断を「疾病」(disease)とし、この二つが「病気」(sickness)を構成していると捉えるのだが、筆者もこの考え方を採る。

この三つの概念を参照して、ハンセン病にかかわる短歌を次の三つのカテゴリーに分ける。

- (I) ハンセン病患者が、当事者として自らの経験に即して詠んだ「病い」の歌。
- (II) 患者でない者が、ハンセン病やその患者について詠んだ歌。ハンセン病の一般的な知識やイメージにもとづいて詠まれた「病気」の歌。
- (III) 医師などの医療従事者が、ハンセン病についての医学知識を前提としてハンセン病やその患者について詠んだ歌。「疾病」の歌とする。

以下、(I) (II) (III) を合わせて、「ハンセン病短歌」と呼ぶこととし、今回は (I) と (II) のカテゴリーの短歌について検討していく。

1. 「病い」を詠む―「病いの語り」としての短歌

医学用語を用いてではなく自らの言葉で病いを語ることを、医療人類学や医療

社会学、また臨床医学の一部では「病いの語り」(illness narrative)と呼ぶ。筆者は、患者たちの詠んだ短歌を「病いの語り」ととらえる⁽⁴⁾。

短歌はフィクションではないか、と考える読者もおられるだろう。短歌を詠む者の間では、ある短歌のなかに現われる主体は「作中主体」と呼ばれる⁽⁵⁾。少なくとも明治から終戦までの短歌においては作中主体＝作者であることが要請されており、本稿が短歌は作者の自らの病気についてのナラティブと捉えることができる。

明治に入り人々が個人の日常生活を詠むことを始め、病気も歌の題材となった。周知のように、結核を患っていた正岡子規(1867～1902)は自らの病いについて短歌と俳句、さらに『仰臥漫録』や『病床六尺』などの日録や随筆をのこした。1914年に歌人の尾山篤次郎が編んだ『大正一万歌集』という文字通り一万近い短歌を取めた膨大なアンソロジーには、「病」のカテゴリーがあり、原阿佐緒から長塚隆まで二十五人の歌人の二十九首が掲載されている(尾山1914)。病気は、短歌の題材として認知されたのである。

当時結核は社会の大きな問題とされていた。尾山が選んだ「病」の二十九首のなかで最も多いのは結核を病んだ歌人の歌で、啄木十一首、長塚隆六首が採られている。子規以後多くの歌人が自ら病む結核について歌を詠んだが、代表的な歌人として、「鍼の如く」(1914～15)で知られる長塚隆(1879～1915)、没後に『松倉米吉歌集』(1920)が出た松倉米吉(1895～1919)がまず思い浮かぶ。

ハンセン病患者の短歌が世に知られるようになったのは、1926年に九州療養所から合同句歌集『檜の影』第一集が出てからで、その後合同歌集や単独歌集が次々と出版されていった。冒頭で紹介したように、1938年1月に改造社が出した明治以後の短歌のアンソロジー『新万葉集』の第1巻に明石海人の短歌十一首を筆頭に数名のハンセン病患者の短歌が取められ話題となり、「癩短歌」がブームとなった。翌39年には明石海人がやはり改造社から出した『白描』がベストセラーとなり、「癩歌人」として一躍脚光を浴びることでブームはピークを迎える。

2. 「病い」の歌：ハンセン病患者の病いの語り、ライフヒストリー、 オートエスノグラフィ そして自己民族誌

ハンセン病短歌には膨大な数の歌があるが、最も多いと思われる (I) の歌をみていこう。先述のように、1926 年に九州療養所から出された『檜の影』第一集を嚆矢として患者たちの合同歌集がいくつも出されてきた。単独歌集も数多く出版されており、終戦までの代表的な歌集として、島田尺草『一握の藁』(1934)、前節で紹介した明石海人の『白描』(1939) があげられる。医師で歌人の内田守は、尺草と海人をそれぞれ九州療養所と長島愛生園で指導していた。本稿では、この二人の自らの病気についての歌を検討していく。

島田尺草 (1904 ~ 38) は、1919 年 16 歳で発病し故郷を出て薬を求め各地を放浪した後、24 年 11 月に熊本の公立のハンセン病療養施設である九州療養所 (現在、国立療養所菊池恵楓園) に入所する。この年の 4 月から、医師になったばかりの内田守がここに勤務していた。尺草は、1933 年に『一握の藁』、37 年に『櫟の花』をいずれも短歌結社の「水甕社」から出している。この二冊の歌集は私家版や療養所が出版したものではなく、結社が出した最初のハンセン病患者の歌集という点、すなわち短歌の世界で一定の評価を受けて出版されたという点が重要である。以下、尺草の没後に内田が編集した『島田尺草全集』(内田編 1939) で、尺草の短歌を検討していく。

1928 年の作に、「病患に直面して」という題の五首一連がある。一連全体に対する詞書として、「歌は懺悔なれば自ら忌避せず病患に直面することこそ最良の克服法なりと教えられる」とある。内田は『島田尺草全集』の解題「尺草の人と歌」(以下、「解題」) で、島田にこう教えたのは自分だと書いている (内田 1939: 274)。

尺草の歌をいくつか読んでみよう。

我病幾年ひめて来しものをあらはに言へば寂しかりけり

秘めて居し我の病も歌の上にはいつはらずけり 豈くいめやも

眼を病める友にしあればひそかにもむしんの手紙我にたのめり

当時のハンセン病患者は、自分や家族に対する差別を避けるため病気を隠してい

た。ハンセン病患者であることを公にするには、患者としての人生を引き受けるという決断をしなければならなかったのである。一首めを詠んだ時に尺草はすでに九州療養所に入っていたので、これは追想の抒情歌である。「寂しかりけり」は短歌の表現としては未熟かもしれないが、その時の尺草の感情が伝わってくる。この歌のように、ハンセン病患者の病いの短歌は巧拙を超えて貴重な病いの語りとなっている。

二首めの「豈くいめやも」は、自分の病気を忌み嫌わないという決意表明で、そこには内田の教えに従って運命を引き受ける尺草がいる。三首め。ハンセン病で眼を病む者は多かった。尺草も後に失明するが、この時はまだ眼を侵されてはいなかった。療養施設の患者は、自分の家族の所在を他の患者に知られるのを怖れていた。どこからか情報が漏れ、自分がハンセン病で療養施設にいることが外部の人に知られると、家族が迫害される可能性があったからである。だから、眼が悪くなっていた友人は、信頼できる尺草に頼んでおそらく親族の誰かに金を無心する手紙を書いてもらったのだ。

1932年から、病いについての連作が増えるが、それに先立つ31年の最後の連作「療院生活八年」（三首一連）に、

注射もせず薬ものまずなりはてり心荒びのしるきを思ふ

という歌がある。効果の期待できない治療を受けなくなっていたこと、そして最早自分はよくならない、いや悪くなる一方だという現実心がひどく荒んでいると捉えている。この歌には諦観とそれを見つめる客観があり、内田の言う懺悔としての歌と捉えることができる。

続いて、明石海人の短歌を読んでいく。明石海人（1901～39）は、1926年に25歳でハンセン病と診断され、和歌山の粉河や兵庫のハンセン病治療施設私立明石楽生病院で療養生活を送った後、32年11月に岡山の国立らい療養所長島愛生園（31年3月、患者の受け入れ開始）に入った。35年に失明し、38年には気管切開を受けている。39年2月歌集『白描』を改造社から出版するが、同年6月に37歳の人生を終える。

『白描』は、「第一部 白描」、「第二部 翳」の二部構成をとっている。本稿では、「病い」の歌が多く含まれている「第一部 白描」（以下、「白描」）を検討する。「診

断」、「島の療養所」、「失明」、「気管切開」などの十四の連作からなる「白描」は、ある男が癩と診断された日の描写から始まり、失明し、気管切開を受けるにいたる時の流れ、すなわち「明石海人」というハンセン病患者の診断から死の直前までのライフヒストリーとなっているのである。尺草の二つの歌集も経時的な病いの進行を示すが、病いとは直接的には関係ない歌も相当数含まれており、「白描」のように発病から病気の進行を中心として構成されてはいない。

以下、『白描』の第35版によって、「白描」を検討する（明石 1940）。「白描」最初の連作「診断」は、さらに「診断の日（二十三首）」、「その後」（四首）、「家を捨てて」（十首）の三つの部分よりなる。歌集としての『白描』は、「診断の日」の次の一首から始まる。

病名を癩と聞きつつ暫しは己が上とも覚えず

医師の眼のしきを趁ふ窓の空消え光りつつ花の散り交ふ

短歌における詞書は短歌のコンテクストを明確にする場合があり、「白描」では当時のハンセン病について知る貴重な手がかりを与えてくれる。そのため、本稿で引用する海人の短歌はその詞書を省略せずに掲載する。海人を癩と診断した医師の目の穏やかさ、その眼の背後の窓の外には桜の花びらが明滅しながら散り交わっている。詞書と相まって、この歌は癩の診断を受けた時の茫然自失した海人が的確に示されている。

短歌を通して、海人のハンセン病がどのように進行していったかを追ってこよう。以下、短歌を引用する場合、短歌の後に、連作のタイトル／さらにその下位分類のタイトルを、たとえば「島の診療所／医局」といったように表記する。

きらら 雲母ひかる大学病院の門を出でて癩の我の何処に行けとか

診断の日／診断の日

診断を今はうたがはず春まひる癩に墮ちし身の影を踏む

診断の日／診断の日

人間の類を逐はれて今日を見る狙仙^{そせん}の猿のむげなる清さ

診断の日／診断の日

この三首に、当時の癩患者が社会的にどのような立場に置かれていたかを見て取ることができる。癩患者となることは、「人間の類を逐はれ」ること、すなわ

ち人間とは異なるカテゴリーの生き物に堕ちることを意味した。それゆえに、癩と診断された海人は、どこに身を置いたらいいのか途方に暮れるのである。

その後、職を辞して一人和歌山の粉河で療養生活を送っていた海人に二歳にもならぬ次女の訃報が届けられる。

すでに^{すで}己^{はふ}にして葬りのことも済めりとか父なる我にかかはりもなく

紫雲英野／紫雲英野 (21)

子が亡くなっても、家族から自分に連絡があったのは葬式が済んでからだったという事実に対する感慨を詠んだ歌である。葬式という公的な場には、亡くなった者の父であろうとも癩患者が現われることが忌避されていたことが明確に示されている。同じ一連には次のような短歌がみえる。

ながらへて癩^{かたみ}の我や己^{うべ}が子の死しゆくをだに肯はむとす

紫雲英野／紫雲英野

世の常^{おやこ}の父子なりせばころゆく嘆きはあらむかかる際^{きは}にも 同

一首めは自らの子の死に対して、悲しみという感情を持つことができなくなっている自分を見つめた短歌で、二首めには癩を患ったために子との間に「常の世の父子」との関係を持つことができなくなったことが詠まれている。

一方、「診断」の一連に収められている次の短歌は病気に対する責任とかかわっている。

ありし日は我こそ人をうとみしかその天刑を今ぞ身に疾む 診断／診断の日
「天刑」とは天が下す刑罰という意味で、「天刑病」はかつてハンセン病の別称だった。かつて人を疎んだのだろう自分が、今はハンセン病という天刑を受け人から疎まれているという意味の歌である。世間の強い忌避感があるこの病気に対して、患者は責任を持たなければならないという考えがあったのである。

「白描」の三番目の一連「島の療養所」以降は、長島愛生園での生活が詠まれている。

父母のえらび給ひし名をすててこの島の院に棲むべくは来ぬ

島の療養所／医局 32

当時の癩療養所では、一般的に患者たちは仮名を用いていたが、明石海人も例外ではなかった。癩療養所での仮名の使用は、一般社会からの隔絶を意味している。

四九首からなる「島の療養所」は、さらに「納骨堂」、「医局」、「大楓子油」（当時治療に用いられていた）、「白罌粟」、「骨壺」、「静養病棟」、「盆踊り」、「追悼」、「補助看護」（軽症患者による重症患者の看護）、「病める友」に分けられており、治療、患者たちの娯楽、患者の臨終等々について詠まれた歌が収められている。読者は、この一連を読むことによって「島の療養所」である長島愛生園を概観できるようになっている。一連のなかで最も多い七十五首の「春夏秋冬」では島の自然が、「失明」では文字通り自らの失明が、「不自由者寮」では盲目となった海人の不自由者寮への転居が、「気管切開」では自らの受けた気管切開について詠まれている。

エスノグラフィー
民族誌を、ここではひとまず、ある場所に生活する人々の生活について書かれたもの、としておこう。すると、次のように捉えることができる。尺草の二冊の歌集は、ハンセン病患者の語り、そしてライフヒストリーとして読める。明石海人の『白描』の「第一部 白猫」は、この二つに加えて長島愛生園に患者として生きる者によって短歌という形で表現された民族誌としても読むことができるようになっているのである。

3. 「病気」の歌：皇后の短歌のなかのハンセン病患者

1932年11月10日、大宮御所（現在赤坂御所となっている場所にあった）で宮中歌会が開かれた。主催したのは大正天皇の後だった貞明皇后（1884～1951）で、歌会の兼題は「癩患者を慰めて」である。この歌会には、貞明皇后をはじめ8人の皇族と47人の関係者合わせて55人が歌を出しているが、御所の歌会でこのような題が選ばれたことに驚いた参加者も少なくなかったに違いない。この歌会に出詠された短歌はすべて、(II) 患者でない者が、ハンセン病やその患者について詠んだ歌、すなわち「病気の歌」ということになる。

ハンセン病と天皇制と短歌の関係を考える際に、この歌会は非常に重要な出来事である。なぜなら、結果的に、彼らは歌を詠むという行為によって「癩患者」という社会から疎外された存在も気にかけているのだと表明することになったからである。そして、この歌会で最も重要な歌は貞明皇后の次の歌である。

つれづれの友となりても慰めよ行くことかたきわれにかはりて

歌意は、行きたくても行くことができない私の代わりに患者の友となって持ち無沙汰な患者たちを慰めよ、というものである。

半ば国家機関の癩予防協会が皇后のこの歌を含めすべての出詠者の短歌を収めた小冊子『大宮御所御歌会兼題詠歌写』を作ったが、その巻末には内務大臣山本達雄の講話が載せられている⁽⁶⁾。この小冊子が各府県知事、官公立療養所長等々の関係各所に配布された背景には、皇室の権威によって協会と国の政策である絶対隔離政策を正当化する意図があったと考えられる。

この講話で、内務大臣山本達雄は、貞明皇后の「思召し」によって「政府当局も癩予防施設を拡充し、民間においても癩予防協会を始め各種の団体いづれも活気を呈する」に至ったとした後、次のように述べている。

この御歌を拝誦する国民は、ひたすら御盛徳に感泣し、癩の予防救護に一段の力を致すと共に、一日も早く国民の間からこの悪疫を根絶して、以て御心を安え奉るべく感じることに信ずるのであります（癩予防協会 1932：ページ番号なし）。

貞明皇后の「徳」に感謝し、「悪疫」たるハンセン病を撲滅することによって皇后を安心させることが国民の責務とされているのである。

貞明皇后は、遅くとも 1915 年からハンセン病療養施設への援助などの慈善活動を行なってきたおり、この歌会はその一環として行なわれた。貞明皇后のこの歌はハンセン病患者の隔離を推進した「救癩運動」で頻繁に引用されるようになった。また、ほとんどの公営の療養施設で貞明皇后のこの歌の歌碑が建てられた。こうして、皇后のこの短歌はハンセン病にかかわる医療のなかで大きな意味を持つようになっていった。それは隔離する側である医療従事者や政策担当者、隔離される側の患者を問わない。

4. コンタクト・ゾーン

4.1 コンタクト・ゾーンとしての「らい療養施設」

「コンタクト・ゾーン」(contact zone) は、文学研究者のプラットが植民地における文芸を研究した著書『帝国の眼』(*Imperial Eyes*) (1992) で用いている分析

概念である。2008 年に出た同書の第二版で、プラットは「コンタクト・ゾーン」を次のように定義している。

複数の文化が遭遇し、衝突し、格闘する空間。それは、文化間の力関係が均等でない状況、たとえば植民地主義や奴隷制、そしてそれらの終焉後の状況でしばしば生じる (Pratt 2008: 8)。

ハンセン病療養施設、より限定して医師で歌人の内田守が患者たちの短歌の指導をして、彼らの作品を療養所の外の人々が読みうる形にした九州療養所と長島愛生園について考えてみよう。

医学生時代から短歌を詠むとともに、在学していた熊本医専の学生らと短歌が中心の文芸雑誌『人間的』(1922 年創刊)を出し、「地方歌人としてやや知られていた」という内田は、医師として九州療養所に着任すると患者たちから短歌の指導を請われた(内田 1976: 8)。内田が主導して九州療養所で毎月行なわれるようになった歌会には、「二十人くらいの出席」があったという(内田 1976: v)。この歌会を礎として、『檜の影』第一集(1926)、第二集(1929)の合同歌集が編まれ、さらに第 2 節で紹介した島田尺草の二冊の歌集が出版された。内田は転任した長島愛生園でも患者たちに短歌を指導し、明石海人らの歌人を育てた。医師であり歌人でもあった内田は、患者たちの上の立場にあった。つまり、両者の間には力の不均衡が存在したのである。まず、このことが二つの療養施設をコンタクト・ゾーンと考える根拠である。

さて、『帝国の眼』で、プラットはコンタクト・ゾーンにかかわる二つの重要な指摘をしている。一つめは、ヨーロッパ以外の場所を旅行するヨーロッパ人や探検するヨーロッパ人の「反—征服」(anti-conquest)的態度は、露骨な植民地主義者とは異なる「ヨーロッパのブルジョアたち」である彼らの無害さを保証しつつも、ヨーロッパの覇権は主張しているという指摘である (Pratt *op. cit.*: 8~9)。

翻って九州療養所と長島愛生園について考えてみよう。内田守をはじめ患者たちの文芸活動を支援した療養所の勤務者たちは、たしかにヒューマニストの側面を持っていた。そして、彼らがいたからこそ私たちは当時のハンセン病患者たちの病いの語りに耳を傾けることができる。しかし、ハンセン病患者を絶対隔離するという当時のシステムに、彼らはなんら疑いをもっていなかったことも事実で

ある。プラットが指摘したような構造、すなわち自らの立場が被征服者の上位に位置することを前提とした上で、征服には反対する者として被征服者あるいは旧植民地の人々に接するという心^{メンタリティ}性は、自らの立場が絶対的であることを疑わずに患者たちを哀れみ、彼らの力になろうとした九州療養所や長島愛生園の勤務者たちの心^{メンタリティ}性と通底しているのではないか。

内田は、短歌が療養所に隔離されている患者たちと外部の人々をつなぐと考えていた。「私は毎日メスを執り注射器を握りつゝあるがその心は常に暗い」とは、当時有効な治療法がなかったハンセン病の療養施設の医師としての内田の心情の吐露である（内田 1926: 88）。一方、内田は「彼等の前に芸術の本態を説き、彼等の行くべき道を力説する時こそは実に明るい心」を感じたと記している（*ibid.*）。なるほど、歌を詠むことによって安らぎを得た患者はいるに違いない。しかし、内田が「進むべき道」と語る時、そこにはパターンリスティックな態度が明らかであり、その道の行きつく先には彼が考える理想の患者像が存在しているのである。それは、不治の業病とされていたハンセン病を「忌避せず病患に直面する」患者であり、まさしく内田が明石海人に見出した理想的な患者像なのだった。

プラットの第二の指摘は、コンタクト・ゾーンにおいては「自己民族誌」（autoethnography）が重要である、というものである（Pratt *op. cit.*: 9）。プラットは、この概念を、植民地の先住民が征服者のもたらした表現方法を用いて自己を語ることと定義している。筆者の理解では、自己民族誌とは、ある場所に外部からやって来て一定の期間そこで調査を行ない去って行く「他者」（その代表例は文化人類学者である）が記述したその場所に生きる人々の記録ではなく、そこにずっと生活している人々が自らの生活について書き記したものである。

プラットは、スペインに征服されたアンデスの先住民グアマン・ポマが1615年に書き残した手稿を例としてあげる。この年代記は、アルファベットを用いてスペイン語で書かれているだけでなく、スペイン人の描画の一手法である線画も用いている。つまり、グアマン・ポマは、征服者であるスペイン人がもたらしたものをを用いてインカの年代記を書き表した。換言すれば、他者の表現様式を用いて、自らを表現したのである。

この点から九州療養所と長島愛生園の二つの療養所を考えると、そのどち

らにも短歌で自らの病いを語った者たちがいた。先に指摘したように、明石海人の『白描』、特に第一部の「白描」は、すぐれて自己民族誌的なテキストなのである。

4.2 コンタクト・ゾーンとしての短歌

プラットはコンタクト・ゾーンを現実の場所として考えているが、短歌という言葉空間をコンタクト・ゾーンとして捉えてみたい。『檜の影』第一集を嚆矢として、療養施設の患者たちの短歌は、療養施設の外の人々が読みうるものとなった。そして、貞明皇后の「御歌」は、療養所の患者たちに届けられた。

では、この歌にハンセン病患者の歌人たちはどのように反応したか。彼らは、返礼する形で短歌を詠んだのである。九州療養所では貞明皇后の「つれづれの」の歌を奉戴する式典が行なわれた。島田尺草は、1933年に「大御心」という題の五首一連を作っている。詞書は、「皇太后陛下には我等患者に深く心を用ひさせられ先年は御下賜金を賜ひ昭和七年十一月十日再び御歌を賜ふ畏き極みなり一月七日の拝受式に列席して」となっている。一首引用する。

大御代の光りあまねくみちたらひ生きゆく心まどかなるかも

一方、明石海人の『白描』にも、「恵みの日に」という二首一連があり、次の歌がある。

みめぐみは言はまくかしこ日の本の癩者に生れて我悔ゆるなし

このように、短歌は皇后と患者たちが出会うコンタクト・ゾーンとなったのである。

註

- (1) 現在「ハンセン病」という名称が用いられており、かつて差別的な意味で用いられた「癩」や「らい」は用いられない。本稿では、原則として「ハンセン病」を用いるが、歴史的な文脈でのみ「らい」「癩」を用いる。
- (2) 歌会始をはじめとして、短歌は現在も天皇制と密接な関係を持っている。宮内庁のホームページによれば、2019年の歌会始には海外からのものも含めて21,345首の応募があった。

<http://www.kunaicho.go.jp/culture/utakai/eishinkasu.html> (最終アクセス日 2018年10月30日)

- (3) 歌人としての内田は、内田守人（ルビ もりと）のペンネームを用いたが、本稿では引用文献での表記を除いて内田守で統一する。
- (4) 「病いの語り」については、たとえば、クラインマン（1996）、フランク（2002）を参照のこと。
- (5) 「作中主体」という概念がいつ頃現われたかは現時点でははっきりしないが、早くても1950年代と考えられ、今後調査を予定している。
- (6) 癩予防協会は、1931年に貞明皇后の下賜金をもとに渋沢栄一を会長として発足した。

引用文献（アルファベット順）

明石海人（1940）『白描』東京：改造社

荒井裕樹（2011）『隔離の文学－ハンセン病療養所の自己表現史』、東京：書肆アルス
フランク、アーサー・W（2002）『傷ついた物語の語り手』東京：ゆみる書房

Freidson, Eliot（1970）*Professional Dominance*. Chicago: Aldine

藤野豊（1993）『日本ファシズムと医療』東京：岩波書店

クラインマン、アーサー（1996）『病いの語り』東京：誠心書房

大内郁（2008）「戦中期の『皇恩』とハンセン病者の文芸－序説」三宅晶子編『身体・文化・政治』（人文社会研究科研究プロジェクト報告書第156集）千葉大学大学院人文社会研究科、pp. 63-73

中山良馬（1984）『『小島の春』出版の頃』西坂保治、河本哲夫、秋山憲兄編『日本キリスト教出版史夜話』東京：新教出版社、pp. 83-85

尾山篤次郎（編）（1914）『大正一万歌集』、東京：岡村書店

Platt, Mary Louise（2008）*Imperial Eyes*. 2nd ed. New York: Routledge

癩予防協会（1932）『大宮御所御歌会兼題詠詩写』東京：癩予防協会

内田守人（1926）「巻末附記」内田守人編『檜の影』第一集、熊本：九州療養所檜の影会、pp. 87-89

内田守人（1939）「尺草の人と歌」内田守人編『島田尺草全集』東京：長崎書店、pp. 271-284

内田守人（1976）『生れざりせば』東京：春秋社

内田守人編（1939）『島田尺草全集』東京：長崎書店

